

めて、それは乳酸菌と酵母の好氣的な堆肥だったのだと、頭の中でつながったという。

水田は海のすぐそばで、大潮の時には海水が入ってくるがよくあった。その時、稲は苗が小さい時なら塩分に強く、穂が出る時には弱いということを実体験として学んだ。沖縄は干ばつも台風も多く、二期作目は被害が甚大である。中学時代までは米を一生懸命作っていたが、サトウキビの方が断然儲かるということで、高校時代には、祖父の家でも水田やイモ畑はサトウキビ畑に転換していった。農林高校では寮に入っていたが、サトウキビの収穫時は毎週遅くまで収穫を手伝い、朝一番のバスで学校へ戻った。

* * *

危険なハブの棲む、ジャングルのように野性的な当時の今帰仁村の大自然の中で、自然の観察眼が養われ、自然がわかるようになった。比嘉照夫教授の豊かな感性の原点はここにある。そして、屋我地島の広い農地で祖父からプロ農家のトレーニングを受けることによって、沖縄の農業に対する問題意識や情熱が育まれた。

また、興味のあることはとことん観察したり、試行錯誤を重ねる。「正体見たり」と納得するまでは気がすまない。「失敗して

痛い目にあつたら普通はそこでやめてしまうが、僕は、じゃあ次はこうしよう、と思う」。蜂に刺されたり、魚を逃がしたりした失敗経験から作戦を変更して、もう一度やってみようと、照夫少年は成功するまでやってみる経験を積み重ねてきた。そこから、「失敗の本質」を学んだという。

物事というのは、成功しかかっているのに、あるところで何かに引っかかって失敗する。つまり、失敗と成功は最悪で50対50の確率だ。「僕は失敗した瞬間に、その原因がわかる。だから再チャレンジすることには全く抵抗がない。せつかく50%以上まで来ているのだから、あきらめたり、新しくゼロからやり直すよりも、そこを修正したほうがずっと簡単に確実に成功する。だけど、何度やつても失敗するのは『馬鹿』と言う（笑）」。

大自然の中に溶け込み、自然に対する観察力を身につけ、膨大な経験知を蓄えている比嘉教授。私たちが理解しているEMのレベルと、比嘉教授のEMのレベルはきつと全然次元が違うにちがいない。私たちがEMの本質を悟る為には何をすればいいのか。本部半島の旅の帰り道、楽しい比嘉教授の後姿を眺めていると、人が分け入ったことのないような深い深い森の匂いがした。

今帰仁城跡からの眺め。中央の海の向こうに見えるのは古宇利島。
その手前のあたりに、小中学校時代によく魚獲りをした海岸がある。